



19期卒業生 上田 樹一 さん Kiichi Ueda

主に木を用いた家具や内装を製作するユニット「NIWATORI」を立ち上げ、現在福井県にアトリエをかまえて活動されています。学園に通っていたころは自然のなかで遊ぶことやものづくりが楽しくてしょうがなかったという上田さん。シュタイナー教育に出会ったきっかけや、学園での学びについてお話を伺いました。



**体をつかった遊びが学びと
一体になっているような
シュタイナー学園の学びは
面白かったし心地よかった**

▼シュタイナー教育に出会ったきっかけはなんだったのでしょうか？

親戚が京都のシュタイナー幼稚園に通っていたのをきっかけに母がシュタイナー教育を知り、共感し、4つ上の姉も自分もシュタイナー幼稚園に通い始めたのが出会いです。そのころは名古屋に住んでいたのですが、名古屋にあるシュタイナー幼稚園に通っていました。小学校は公立に入学したのですが、父の仕事で転勤が決まり、東京に行くことになったんです。それならば、という感じで、藤野のシュタイナー学園に2年生の2学期から転入学で入りました。

▼印象に残っている学びはありますか？

4年生で取り組んだ「家づくり」は印象に残っています。毎年、クラスごとにいろいろな形態の家を作るのですが、僕たちのクラスは木を生やしてティビ(窓)

のような家を作りました。担任の先生は石橋先生という女性の先生だったので、クラス全員のお母さんのような存在でしたね。あとは、歩いて通学ができる学年になってからは、とにかく駅から学園まで歩いていくのが楽しかった。僕は高尾からの電車通学だったので、藤野駅からバスに乗って学園に行けるのですが、友達と待ち合わせて山道を1時間くらい歩いて毎日通っていました。雨でも雪でも、とにかく歩きたかった。そのためわざわざ早い電車に乗ってきて、歩いていました。自然のなかで体を動かして遊ぶことが大好きだったので、体をつかった遊びが学びと一体になっているようなシュタイナー学園の学びは面白かったし心地よかったです。でも高学年になってくると、シュタイナー教育に対してどこか斜にかまえて、疑問を先生に投げかけたりもしましたね。「オイリュトミーってなんのためにやるんですか？」とか(笑)。今となつてはオイリュトミーすごくやりたいんですけど。

▼外部の学校に行こうとは思わなかったのでしょうか？

それでもやっぱりシュタイナー教育の学び自体がずっと楽しかったというので、

▼学校の学校に行ったりどこかに就職したりするのは、最初から独立して仕事を始められたのですね。

自分たちのやりたい、という気持ちや若さ、吸収力。今やるべきだな、と思えたんです。木工もシュタイナー学園での経験があつて、できる、と思えたんです。新宿のビルの屋上に小屋を作ったのが最初の仕事で、人のつながりもあり、家具や内装など仕事をもらえるようになっていきました。福井県に家とアトリエをかまえています。依頼を受けたら全国各地をまわって仕事をしています。



「NIWATORI」アトリエでの製作風景

▼なんとなく、で進学をしない、というのがある意味とてもストイックですね。

シュタイナー教育って一人ひとりの個性を尊重していて、テストとかわかりやすい評価はないけど、逆の厳しさもあると思うんです。すべて自分次第。自分の未来はあくまでも自分で決めること、自分で判断することがすごく大事



「NIWATORI」の作品

▼シュタイナー教育で得たと思うものはありますか？

自分が主体になって物事を判断していく力でしょうか。自分を貫きたい、貫ける、と思えるのは、シュタイナー

学園で、先生、同級生、卒業生、保護者…いろんな生き方をしている面白い人たちに出会い、多様性と可能性を知ったからだとも思います。これからは自分を信じて、ぶれることなくものづくりをしていきたいと思っています。

※ネイティブアメリカンの移動用住居の一種で、一端を束ねた木の棒を広げ地面に立てて支柱とし、革やキャンバス布を被せたもの